TOP MESSAGE

思いをひとつに

東日本大震災の発生から3年半が経ちました。

被災地では、港湾関係の復旧工事はピークを越えつつあり、壊滅的な被害を受けた港湾の機能も、釜石港など一部の港湾を除いて回復してきています。復旧から復興へ着実に歩みを続けていますが、一方では、復興事業は遅れ気味とも聞かれ、復興のさらなるスピードアップが求められています。

当社は、震災発生直後からこれまで、港湾工事を中心に復旧・復興支援に尽力してまいりましたが、本格復興の早期実現に向けた一助となるべく、引き続き、全社をあげて取り組んでまいります。

期待と信頼に応える企業として

東日本大震災の発生以来、切迫する首都直下地震や南海トラフ巨大地震等の大規模災害に対する防災意識が高まっています。政府は、「国土強靭化基本計画」とそのアクションプランをまとめ、巨大地震で懸念される建造物の倒壊や大津波に備えるとしました。

また、2012年12月には中央自動車道笹子トンネルで天井板落下事故が発生。前々から幾度となく、社会資本の老朽化対策の必要性は指摘されてきましたが、道路や橋梁、港湾施設、上下水道など、老朽化が進む社会資本の維持管理・更新への対応はますます重要になっています。政府は「インフラ長寿命化基本計画」をまとめ、国民の安全・安心を確保するため、大切なインフラを未来につないでいく指針を示しています。

社会資本の整備・維持は、建設業者にとって本業であるとともに、課せられた大きな使命です。これからも、当社がもつ技術力を最大限に発揮して、時代のニーズに的確に対応し、顧客と社会からの期待と信頼に応えられる企業としての社会的責任を果たしてまいります。

また、「エネルギー基本計画」の中で、再生可能エネルギーを重要な低炭素の国産エネルギーと位置付け、導入を最大限加速するとしています。当社は、低炭素・資源循環・自然共生の実現に向けた再生可能エネルギーへの取り組みにも力を注いでおります。

思いをひとつにして次世代に

当社の歴史は、創業者である浅野総一郎が欧米視察の際に日本の港湾の脆弱性を痛感し、東京湾に近代的な港を築いて東京・横浜間に一大工業地帯をつくるという壮大な夢を実現するために、1908(明治41)年に鶴見川の河口に広がる海面約150万坪の埋立事業計画を神奈川県庁に提出したことに始まります。浅野総一郎と、この夢に共感し支援をした安田善次郎、渋沢栄一の3氏を象徴的に描いたのが、当社のシンボルマークである「三羽鶴」です。

その4年後の鶴見埋立組合の設立を経て、鶴見埋築株式会社を1914（大正3）年に創立してから、今年で100年になります。この間、時代のニーズに応えながら、あるいは先取りしながら変化しつつ成長し、社会から信頼される企業としてその責任を果たしてまいりましたが、創業から現在に至る歴史を顧みますと、その道のりは決して平坦なものではなかったと言えます。

こうしたなかで、不屈の精神を表すに相応しい、七転び八起きの上を行く“九転十起”の人生を貫いた創業者の思いは、当社の経営理念である社是と相まって、当社の企業活動の根底に脈々と受け継がれてきました。

このような当社が培ってきた良き社風、心の底に刻まれた東亜魂ともいうべき心意気は、これからも変わることなく次の世代につなげていかなければなりません。

これからも会社が健全な姿で発展し続けることをめざして、「思いをひとつにして」取り組んでいく所存です。

企業としての社会的責任を果たすために

現在当社は、2013年4月に策定した「中期経営計画」（2013年度～2015年度）を推進中です。

この計画では、「経営資源を再配分し、経営基盤の強化を図り、企業としての社会的責任を果たす」という命題を掲げ、経営目標の達成に向け、役職員が一丸となって取り組んでおります。

引き続き、ステークホルダーの皆さまにおかれましては、ご支援を賜りたく、お願い申し上げます。

本報告書は、当社グループのCSRに関する活動実績をまとめたものです。ご一読いただき、皆さまからの忌憚のないご意見を賜りますよう、お願い申し上げます。

代表取締役社長 松尾正臣